

## 壇浦兜軍記

### 阿古屋琴責の段

梟の脛、短しといへどもこれを継がば憂ひなん。鶴の脛、長しといへどもこれを断たば悲しみなん。民を制する事この理に等し。

されば治まる九重に猶も非常を戒めの、水上清き堀川御所、当時鎌倉の殿命に従ひ、秩父の庄司次郎重忠、禁裏守護の代官として、かねては民の公事裁判、私の計らひなく、道に曇らぬ十寸鏡、智仁の勇士と輝やけり。

同席に相並ぶ岩永左衛門致連、南都東大寺の建立より直ぐ様都に押し留まり、重忠の助役と号し、悪七兵衛景清が在処を探す邪智倭奸、表は忠義に見せかけて、己が遺恨を差し挟む心の底の二股竹、虎の威を借る狐とは、きよろつく顔に頷れたり。

かゝる折から秩父の郎党榛沢六郎成清、遊君阿古屋を拷

重忠押し止め、

「イヤまづ待たれよ岩永。縄を赦し拷問を緩めしも様沢が私ならず、某が了簡。その上に今日の暮れまではこの方の計らひ。其元のお構ひないはず。要らぬ世話、御無用、御無用。コリヤヤイ阿古屋、今日もまだ白状せぬ由、テサテしぶとい何故言はぬ。さりながら、それもナア、無理とは思はぬ。義理と情けを表に立つるが遊君の習ひ。いかに責めらるゝが辛いとして、馴染みを重ねた夫の行方、つい心とも明かされまいさ。さなきだに流れを立つる女は、誠なき者とひと向きに心得し輩もあれば、それらが誇りもつたてく思ひ、または同じ憂き節を勤める。友朋輩の顔汚しなどと思ふての事ならん。がこゝをとくと合点せよ。景清が行方存ずべき者なればこそ、搦め捕つて詮議もする。有様に白状すれば、忝くも鎌倉殿の御意を安んじ奉り天晴れの御奉公。万人の誹りを受けても君一人の御心に叶はゞ、その身の冥加悪しからまい。こゝをよつく弁へて、サアさつぱりと景清が在処、

問の時刻も限る未の刻、六波羅より立ち帰る御門に降ろす四人駕、簾を上げて引き出たす。

姿は伊達の打掛や、戒めの縄引き替へて、縫ひの模様糸結び、小褌取る手も儘なれど、胸は解けぬ思ひの色、形は派手に気は萎れ、

筒に生けたる牡丹花の、水上げかぬる風情なり。

榛沢六郎御前に出で、

「仰せに任せ縄を赦し、様々宥め不憫を加へ尋ね問ひ候へども、何分景清が行方存ぜぬとばかり。他に申す口もこれなき故召し連れて候」

と、披露半ばに岩永左衛門、

「ヤア無念なり榛沢。科人に縄も掛けず、その上見れば拷問に疲れたる気色も見へぬが、ム、聞こえた。さては御辺が今日の拷問、生温くやられしな。ヨイ、ヨイ、明日は拙者が受け取り、早々家来任せにもなるまじ。自身の手並み見せ付け、景清が在処ほざかして見せう。侍共やい、あの女め、岩永が屋敷へ引け」と例の粗忽を

この重忠に聞かせい」

と、物柔かに理を責めて、しかも堪ゆる詮議の詞。

阿古屋は聞いて、

「さつても殿しい殿様。四相を悟る御方とは常々噂に聞いたれど、何の子細らしい。四相の五相の、小袖に留める伽羅ちやまでと仇口に言ひ流せしが、今日の仰せに、マ我が折れた。勤めの身の心を汲んで忝い仰り様。何々の誓文で景清殿の行方知つてさへあるなら、お心に絆されついでいぼんと言ふて退けうが、何を言ふても知らぬが真実。それとても疑ひ晴れずば、ハテ、いつまでも責められうわいな。責めらるゝが勤めの代はり、お前方も精出してお責めなさるが身のお勤め。勤めといふ字に二つはない。ア、浮世ではあるぞいな」

と、言ふに傍から堪えぬ岩永、

「ヤアベリくとはつしやいだ頤骨。是非白状をせぬにおいては、この間の拷問に品を替へて憂き目を見する。聞けばうぬ懐胎とな。よいくきつと思ひ付い

た。腹に子のある蟾蜍の格、塩煎り責めにしてくれ  
う」  
と威しかくれば、

「オホ、、、。そんな事怖がつて、苦界が片時なる  
かいな。同じ様に座に並んで殿様顔してござれども、  
意気方は雪と墨。重忠様の計ひとて榛沢様の今日の  
詮議、縄も掛けず責めもなく、六波羅の松蔭にて物密  
やかに義理づくめ。様々と労りて、サア景清が行方  
はと、問はれし時のその苦しさ。水責め火責めは堪え  
うが、情けと義理とに拉がれては、この骨々も砕くる  
思ひ。マそれ程切ない事ながら、知らぬ事は是非もな  
し。この上のお情けには、いつそ殺して下さんせ」

と、とんと投げ出す身の覚悟、  
持て余してぞ見えにける。

重忠榛沢を近く召され、

「かほど心を尽くせども、誠を明かさぬ上からは、目  
通りで拷問せん。それ、それ」  
と仰せある、

「こりやなんぢや、興がるは。責め道具責め道具  
と、なんぞ厳しい事かと思へば、ム、ム、ム聞こえ  
た。拷問に事寄せ、自分の慰み気晴らしをやるるゝ  
な。天下の政道を取り捌く決断所での琴三味線、神武  
この方無い図なほたへ。実に誠世界の有様、天に口無  
し人を以て言はしむとは今思ひ当つた。阿古屋めが懐  
胎、もしもやこの子が女の子なら、琴でやぐわん  
く、三味線で。ア、なんとやらと京中が諷ひしは、  
ム、この前表。この上のばれついで、ちよちよげ、  
なんどもよござんしよがの。ハ、ハ、ハ、ハ、」  
と、嘲弄す。

重忠耳にも入れ給はず、

「ヤレ阿古屋、何故始めぬ。琴を弾かねば景清が在処  
を言ひ明かす所存か」

と、詞もしげき重忠の、  
底の心は知らねども、是非なく向かふ爪琴の、行方をな  
んと岩越すに、糸も心も乱るゝばかり、声も枯野の船な  
らで、甲斐なき調べかき鳴らし。

詞の尾に付く岩永左衛門、

「ヤアく者共、阿古屋めに水喰らはす用意、用意」  
と呼ばはるにぞ、

『アツ』と答へて白洲の内、  
直す梯子を見るにさへ心は上る枕の横槌、庭の片への井  
戸屋形、深くもきしる練車の、胸に響きて気を冷やす、  
阿古屋が心の濁り水、今しも飲むやと覚悟の体。

「ア、仰々し鎮まれく。阿古屋を拷問の責め道具  
は、某かねて拵へ置いたり。誰かある、持参せ

よ」

と、仰せに従ひ持ち出づるは、いとも優しき玉琴に、三  
味線胡弓取り添へて、音締めもさぞと白洲なる阿古屋が  
前に並べ置く。

岩永もぎよつとせしが、『様子いかゞ』と打ち守れば、

「これさ女、その琴弾け。重忠がこれにて聞く」

と、刀を杖に頤もたせ、

「岩永殿もお聞きあれ」

と、打ち解けて見えければ。

（琴影といふも月の縁、清しといふも月の縁。

かげ清き名のみにて、映せど袖に宿らす

重忠耳を聳て給ひ、

「今弾ぜしは、落組の唱歌を我が身の上に取り、景  
清が行方知らぬとな。マア知らずんば知らぬにせよ、  
シテ景清との方が馴れ初めしはいつの頃、如何なる  
事の縁により深い契りの仲とはなりしぞ」

「これはまた思ひも寄らぬ変つた事のお尋ね。何事も  
昔となる恥しい物語、平家の御代と時めく春、馴れに  
し人は山鳥の、尾張の国より長々しき、野山を越えて  
清水へ日毎々々の徒歩詣で。下向にも参りにも道は変  
らぬ五条坂、互ひに顔を見知り合ひ、いつ近付きにな  
るともなく、羽織の袖の綻び、ちよつと時雨の

傘、お安い御用。雪の朝の煙草の火、寒いにせめ

てお茶一服、それが高じて酒一つ。こつちに思へばあ  
ちからも、口説くは深い観音経、普門品第二十五日の  
夜さ、必ずと戯れの詞を結ぶ名古屋帯、終りなけれ  
ば始めもない。味な恋路と楽しみしに、寿永の秋の風

立ちて、須磨や明石の浦船に、漕ぎ放れ行く縁の切れ目。思ひ出だすも瘡の毒、ア、疎まし」

と、語りける。

「オ、さもありなん情けの道、聞き届きしが詮議は済まぬ。この上は三味線弾けい」

「エ、」

「イヤサ、この方の尋める子細を聞かぬ内はいつ迄も」

と、猶望まるゝ三味線の、どうなる事か知らねども、思ひ込んだる操の糸、今さらなんと鉄刀木心の天柱引き締めて。

（三味線 翠帳紅閨に枕並ぶる床の内、馴れし襖の夜すがらも、四つ門の跡夢もなし。さるにても我が夫の、秋より先に必ずと、仇し

詞の人心。そなたの空よと詠むれど、それぞれと問ひし人もなし

「もうよいは、三味線止めい。斑女が閨の託ち草、絶えし契りの一節、時にとつての一興ながら、言訳は暗

いく。西海の合戦に命を逃れ、都に折々紛れ入る景清。そちは度々会はうがな」

「平家御盛んの時だにも、人に知られた景清が、五条坂の浮かれ女に心を寄ると言はれては、弓矢の恥と遠慮がち。ことさら今は日蔭の身、わたしは元より川竹の、あるが中にもつれない親方。目顔を忍ぶ格子先、編笠越しに『まめにあつたか』『アイお前も無事に』とたつたひと口、言ふが互ひの比翼連理。さらばと言ふ間もない程にせはしない別れ路は、昔の後朝引き替へて、木綿々と落ちぶれし。身の果て哀れな物語、ア、おはもじ」

と差し俯く。

「如何様これはかくもあらん。景清程の勇士なれども、実に色は思案の外。どう思案仕直してもこの通りでは済まされぬ。ソレ胡弓擦れ、胡弓擦れ」

「アイ」

と答へて気は張り弓、歌は哀れを催せる、時の調子も相の山。

（胡弓）吉野竜田の花紅葉、更科越路の月雪も。

夢と覚めては跡もなし。仇し野の露、鳥辺野の煙は絶ゆる時しなき、これが浮世の誠なる

誠を顕はす一曲に、重忠ほとんど感に堪へ、

「阿古屋が拷問只今限り。景清が行方知らぬと言ふに偽りなき事、見届けたり。この上には構ひなし」

と、仰せに阿古屋は忝け涙、尽きぬお札を伏し拝めば。

「ヤア、重忠、白いとも黒いとも片付かぬ詮議を、阿古屋めに偽りなしとは何を以て申さるゝ。この岩永は呑み込まぬ。不埒々々」

と言ひほぐす。

「オ、その子細言つて聞かさん。鼓は五声に通ぜずといへども、糸竹の調べは五音四声によつく通じ、直を以て調子とす。曲り偽る心を以てこの曲をなせる時は、その音色乱れ狂ふ。就中この琴、音あるものゝ司として、人の心を正しうし、邪を戒しむると白虎通にも賞し置いたり。こゝを以て重忠が女の心を引

き見る拷問。十三の絃筋に縛り絡めて琴柱にくぐり、科の品々一より十まで、斗為吟ずるを僻事とは申されまじ。琴の形を堅に見れば、漲り落つる滝の水。その水をくれる心の水責め、三味線の二上りに気を釣り上る天秤責め、胡弓の弓の籥責めと品を代へ責められども、いつかな乱るゝ音締めもなく、調子も時の合の手秘曲を尽くす一節に、彼が誠は顕はれて、知らぬ事は知らぬに立つ。調べを正して聞き取つたる詮議の落着。この上にも不審あるや」

と、道理に叶ひし詞の調べ、  
びんともしやんとも岩永は、撥鬘頭搔くばかり、真面目になるぞ心地よき。

重忠重ねて、

「阿古屋が詮議落着といへども、猶この上に某が尋ね問ふべき子細あり。随分勞はり屋敷へ引け」

と、仰せを蒙る榛沢六郎、

「イザ阿古屋、立ちませい」

と、伴ふ情け数々の恵みを思ふ女心、

「ありがとうございます」

と、詞に尽きぬ悦び涙。

岩永は拍子もなく調子に乗らぬ三味線の、天柱替へたる  
落組も、

冥加に余る御情け、つどく御礼も延樟のんくさに、長居は畏れ  
この儘に、直ぐに御前を三下り、

秩父は正しき本調子、

撥利生しろうある糸捌きいとさば、直ぐなる道こそありがたき